

(西暦) 2021 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名:

トゥックチャイ

—— ラオス北部ルアンパバーン県における子の看取りを経験した家族の Grief ——

学位の種類: 修士 (看護学)

東京都立大学大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 看護科学域

学修番号: 20894701

氏名: 赤尾和美

(指導教員名: 野村亜由美)

注: 1 ページあたり 1,000 字程度 (英語の場合 300 ワード程度) で、本様式 1~2 ページ (A4 版) 程度とする。

ラオスの小児医療に関わる中で、民族独特の疾患治療への認識や独特な死後の対応による行動を多く目にし、興味を持った。そこで、本研究では、子どもを亡くした家族がどのような悲しみや思いを抱えながら看取りや死を迎えているのか、どのようなプロセスを経て今を生きているのかについて4つの家族へのインタビューと参与観察による民族誌的調査を行った。

その結果、次のようなことが明らかになった。①民族固有の文化や社会からの看取りに与える影響は大きい、個人の理解や周囲の状況による変容を遂げていた。②先行研究では、異常な死、かつライフサイクルから逸脱した普通でない死と位置付けられていた子どもの死が、本研究では、子どもの死自体を異常なものとして認識する語りは聞かれなかった。③生きることが身体ではなく、Spirit が主体と捉えている家族が、死を個としての出来事ととらえるか、社会や所属する集団・コミュニティの出来事としてとらえるかということが死の場所の選択に影響していた。④4つの家族の語りからは、子の看取りを通して複雑な心のゆらぎが映し出されていた。個々の家族が色々な場面で違う種類の心のゆらぎを経験していた。⑤看取られるものと看取るものが対極にあるのではなく、親と子とその空間を共有している看取りの形を見た。⑥死後の対応では、子どものために<生まれ変わりへの旅>へ送り出すことが大前提にあった。そのために、子どもとのつながりを死後もつなぎとめるのではなく、解き放つような語りが聞かれた。⑦子どもを看取った後の家族の変化には、文化、信心、家族の在り方、社会などからの影響を受け生活を送っていた。⑧子を亡くした親の Grief から見えたものは、生死を身近な存在と受容している力強い生き様であった。生まれ変わりの旅へ送り出すことが親としての最後の責任と踏ん張り、その大役を終え、それぞれが異なる Grief の中にいた。⑨私たち医療従事者は、Grief の中にぶしつ

けに入り込むのではなく、彼らの生き様を見守り心の癒しを助長するための検討しなければならぬ。⑩<トウツクチャイ>という言葉で表現される、心の奥深いところへ押し込まれた悲しみの感情が一連の Grief に見られた。この時期をうまく乗り越えられるかどうか、Grief のプロセスにおいて重要である。ラオス独自の Grief ケアの関わりでは、その見えにくい<トウツクチャイ>を見逃さない目を持つことが必要である。